

## 第6章 まとめ

### 第1節 横穴墓について

今回調査対象となったのは3遺跡計5基であったが、そのうちの3基は中・近世に下る所産と思われることから、都合2基が横穴墓となる。

何れも小糸川の支流である宮下川の中～上流域に単独で立地し、丘陵の支尾根先端近くに占地する共通点がある。その構造は、山高原二町が玄室部縦長アーチ形で左側に一つの棺台（いわゆる造付石棺といつてもよいが）を有し片袖となるも羨道部は不明のもの、また大山野横畠が玄室部方形ドーム形で棺座は不明ながら高壇で長い羨道と墓前域を有するものであった。規模は何れも長径が3mないしそれに満たない小形でありながら、後者はそれに比して大きな墓前域が付属するものであった。遺物は山高原二町が1片の土師器片のみであったのに比べて、大山野横畠は墓前域の覆土内から土師器がまとまって出土した。時期的には8世紀代に入るものであるが、出土状況（覆土中位）からして追葬等に伴う遺物かと思われる。なお、壁面には山高原二町において線刻画がみられたが、これについては別途ふれる。

さて、この2基の年代と位置付けであるが、主に構造面の相対的な編年観から見て、山高原二町横穴は7世紀前半に、大山野横畠横穴が7世紀後半代に位すると思われる。次に構造面では、片側に棺台を有する片袖構造の横穴は主流ではないが、西上総では7世紀代に一定数見られるものである。その一方、明らかな高壇型式の横穴は東上総それも長生地域で7世紀代に盛行するが、西上総の君津・富津地域では壇はあっても高さに欠け（1m前後）<sup>1)</sup>しかも客体である。その意味で前者が単独で存在することにさして違和感はないが、問題は後者をどう解するかである。

その点、長生と君津の中間に位置する市原南部の様相は示唆を与えてくれる。棺座・棺台を欠く方形の玄室プランの大和田横穴群<sup>2)</sup>、全体に羽子板形を呈し玄室・前室・羨道構造を探る西国吉横穴群<sup>3)</sup>、同じく方形の玄室プランながら明瞭な棺台と長い羨道を有するものが多くを占める岩横穴群<sup>4)</sup>、とバラエティに富む。時期的には、大和田横穴群の一部を最古に（6世紀末～）、岩・西国吉（7世紀代）と続くが、前者が上総東部の一般的な傾向に沿うのに対し、岩例は一部に相模東部の影響を認め<sup>5)</sup>、西国吉例となると相模でも鶴見川流域の様相を色濃く示す<sup>6)</sup>もので占められる。3遺跡とも比較的近接した位置にありながらこのような複雑な様相を示しているのである。そして、大和田横穴群の33号横穴ほか、岩横穴群の8号横穴のように、それらに混じって大山野横畠横穴と極めて類似する横穴が存在するのである。

つまり、市原南部は南武蔵や相模の影響化にある西上総とそれとは別の歩みを見せる上総東部の様々な系統の横穴が混在する様相を呈している可能性が高く、山を越えた木更津・君津の山間部も程度こそあれその延長にあるとみるべきで、その一つの例証として大山野横畠横穴が考えられるのではないかろうか。そう考えると大山野横畠横穴も含めそれはむしろ当地のノーマルなあり方といえるかもしれない。

### 第2節 山高原二町横穴群ST001線刻画について

ST001ではアーチ形をなす左右側壁から天井部までと奥壁に線刻画が遺されていた。そのあり方は図示したとおりだが、それが何を意味するのかについて類例と比較・検討する。

県内でのこの種線刻画の検出例は比較的多い。その一覧を次に示す。

遺跡名(註文献)	所在地	壁画の内容
1丸山16号 <sup>7)</sup>	八日市場市大寺	「船か鳥」
2千代丸・力丸 <sup>8)</sup> 6号墓	長柄町千代丸・力丸	家屋2、記号?1
〃12号墓	〃〃	人物3(全身)、鳥1
〃13号墓	〃〃	家屋?1
〃14号墓	〃〃	人物4(全身1、頭部3)、家屋?1、不明1
〃25号墓	〃〃	馬2、人物5(全身4、頭部1)、鞆1、弓と矢1、弓2、翳1ほか
〃26号墓	〃〃	人物頭部?1
〃27号墓	〃〃	鳥1、その他1
〃28号墓	〃〃	人物(全身)1
〃30号墓	〃〃	家屋1
〃31号墓	〃〃	動物3、人物1(半身)、船?1、不明1
〃32号墓	〃〃	人物?(鳥)1、不明1
3長柄 <sup>9)</sup> 6号	長柄町徳増	人物4(全身2、半身?1、頭部1)
〃7号	〃〃	弓を引く人4(うち1は単なる人物か)、人物3(頭部)
〃13号	〃〃	人物5、家1、鳥9?、船1、弓?、三重塔1、五重塔1ほか
〃14号	〃〃	「木の葉状の線刻」
〃30号	〃〃	鳥、家
4鴨谷東部I-11 <sup>10)</sup>	長柄町鴨谷	人物と馬1、鳥2、獸1
5報恩寺1号 <sup>11)</sup>	長南町報恩寺	「天井中央に円形の線刻」
6豊原B1号 <sup>12)</sup>	〃豊原	「天井中央に円形の線刻」
7山崎第10号墓 <sup>13)</sup>	茂原市山崎	人物2(全身1、半身?1)
8押日 <sup>14)</sup>	茂原市押日	人物?1、その他1
9栗木谷 <sup>15)</sup> 2号	岬町椎木	「顔・建物か」
〃6号	〃〃	人物3(全身2、頭部1)
〃7号	〃〃	人物(頭部7)ほか
栗木谷西2号	〃〃	「顔・建物か」
〃3号	〃〃	「建物か」
栗木谷II3号	〃〃	「図柄不明」
栗木谷東6号	〃〃	〃
10根方4号 <sup>16)</sup>	いすみ市深谷	人物4、鳥1、船1、弓矢1
10外部田谷 <sup>17)</sup>	市原市外部田	人物5(頭部2、全身3)、馬1、魚1、鳥1
11大和田 <sup>18)</sup>	〃大和田	人物2(上半身)
12池和田 <sup>19)</sup>	〃池和田	家?1、不明1
13石神第3号墓 <sup>20)</sup>	木更津市中尾	船7、人物(頭部)1、魚2
14西入第1号 <sup>21)</sup>	〃〃	「鳥帽子を被った人物」
15山高原二町 <sup>22)</sup> ST001	君津市山高原	人物1(頭部)、建物(船を乗せた漁屋?)ほか
16胡摩伝 <sup>23)</sup> 1号	〃浜子	「人物」
〃2号	〃〃	「船」
17宝泉寺4号 <sup>24)</sup>	〃放泉寺	刀を振りかざした人物、ほかに人物像1
18鹿島第8号墳 <sup>25)</sup>	富津市西大和田	船1、牛ないし馬1、その他2
〃57号	〃〃	「人物・魚他」
19大満 <sup>26)</sup> I-1号	〃岩坂	船4
〃I-2号	〃〃	船1
〃III-3号	〃〃	馬1
20水神A号横穴群 <sup>27)</sup>	〃〃	船1、馬1、人物(頭部)1
21障子ヶ谷18号 <sup>28)</sup>	〃相野谷	船、鳥
22表 <sup>29)</sup> 3号	〃〃	「船他」
〃8号	〃〃	「線刻」
23北根谷 <sup>30)</sup> 1号	〃〃	「家・馬・人物」・鳥
24寺谷 <sup>31)</sup>	〃岩瀬	「線刻画」
25大作 <sup>32)</sup>	〃亀田	人物、馬、船
26鬼ヶ谷1号 <sup>33)</sup>	〃中	「馬具・船他」

もちろん、横穴の特性からしてこれが総てではありえないが、ある程度の傾向は見出せるだろう。これらを多いものからあげていくと、人物が60例を越え約40%と最も多く、次いで、船（約20例・12%）、鳥（約20例）、家屋（約10例）、馬（7例）、弓ないし弓と矢・弓を引く人（8例）、魚（4例）と続き、特定は出来ないが動物（5例）、その他（鞠（ゆき）や駒（さしば）等）である。その人物については、丸ないし楕円の内部に線と点の目鼻を付け、胴部以下は省くか二本線のみという例が多い。その意味で、山高原二町の奥壁の人物、またそのあり方は当地の一般的な傾向に沿ったものといいうる。

その一方、左右の側壁及び天井はどうかというと、こちらは類例に欠く。そもそも、横穴全体に線刻を施した例は千代丸・力丸25号墓、長柄13号、石神3号、外部田谷、鹿島第8号と限られており、それも3面つまり奥壁と両側壁にのみ認められ、しかも各壁毎に完結する内容である（外部田谷はその点不明瞭）。もちろん、これは玄室構造（障壁のないアーチ形）の差にも起因するのであろう。

その意味で、当例はこの種類例のなかでは希な事例といってよいだろう。この点、千代丸・力丸25号墓のように、死者の生前の身分や地位（貴人ないし武人）を示唆するような例もあるが、一般的に船にしろ鳥にしろそれは葬送にも関係する乗物であり、動物である。また、それ以外も何らかの関連をもって刻まれたと推測する。既に事実記載でもふれているが、右側壁が船を乗せた殯屋であったとしたら、「A」の字状を始めとして、類似する「記号」も同様にみてとれるが、としたらそれは具体的に何を表すのだろうか。概してこの種の「絵画」は稚拙と片付けられがちであるが、それはあくまでも現代人の感覚であり、古墳時代における文化的な表象とみればその意義付けも変わってこよう。当例を含め更なる検討を要する。

### 第3節 中・近世の横穴・岩窟遺構について

山高原二町で2基、宝泉寺で1基の中・近世横穴・岩窟遺構が検出されている。何れもその規模はともかく、形態や構造はそれぞれ異なるものであり、その性格について一概に律し得ない。この点は軟質泥岩の分布する富津市域で多少共通する現象もあり、民俗調査の成果も含め類型化の待たれるところでもある<sup>34)</sup>。ここでは取りあえず現時点でのまとめとする。

山高原二町のST002は陶磁器、炉壁片が覆土下位からまとまって出土した。完形になるものではなく、また、時期的にも中世常滑甕片から近世18世紀代の肥前磁器までの幅がある。おそらくこの岩窟が約10cm前後埋まった時点での投棄を示すものであろう。ということは、下限の磁器の年代を遡る17世紀代以降、18世紀代まで活用されていた可能性大と考えられる。ところがその後、前面の谷が開田され、山裾に沿って道が作られるのに伴い、前方部が破壊されたと見られることは既に記したところである。おそらく、その時点ではこの岩窟そのものが意味を失っていた結果ではなかろうか。とするとそれは民間信仰を体現した祠としての岩窟そのものではなかったかと推測する。

次に、ST003はシルト質の砂の崖面に加え、底面を大きく掘り下げて後に再度埋め戻し叩き締めて床面を作っているなど、横穴墓またやぐらは無論、祠とも相違する。といって近代の貯蔵用ないし物置代わりの横穴とも違うようであり、その意味では近世の横穴の類型の一つとみておくべきか。

一方、宝泉寺は明瞭な横穴構造であるが、奥に広い左右非対称で、平天井且つ荒い壁面整形を施すものであった。横穴前面の塚越家は、明治期になって下の谷から現在地へ上がってきたといい、その時点で既にこの横穴があったようであるから、少なくとも近代以前の所産ということになろう。とはいえ、石塔・